

川越中学校初代校長 増野悦興の謎 (二)

滝澤 民夫

死を「天命に奉答する」として受容している。

四六歳で他界した増野悦興の事跡を訪ねて、丸亀、神戸、京都、大阪、津和野へと足を運ぶ機会を得た。後半生を清貧のままキリスト者・教育者として貫いた硬骨漢増野の強靱な精神の抛り処は何だったのか。清教徒的な伝道者としての使命感と妻咲子の支えであったのではないかと私には思える。



1904 (明治37)年9月25日
女子満4歳の誕生日
(増野潤吉氏蔵)

川越中学校の初代教務主任(教頭)として校長増野を支えた和出亀之助の写真帳に、生後一ヵ月の長女文子を抱いた増野の写真がある。埼玉県第三中学校長としておそらく生涯で最も精神的に昂揚していた時期である。文子は一九〇〇(明治三三)年九月に川越町鷹部屋で生まれた。一年半後の一九〇二年二月二十四日、増野は不本意な休職を命じられた。国立公文書館収蔵の「任免」記録によると、「校務ノ都合ニ依リ」とある。文部省には同年一〇月二〇日付で本人より退職願が出され受理されている。退職後、東京飯田町のユニテリアン教会の牧師に就任してほどなく、一九〇五年に文子が五歳で夭折した。夫妻にとっては重ねての不幸であった。

悲哀のなかで夫は妻を励まし、咲子は日曜学校の生徒向けの冊子として「シオドル物語」を訳出、増野悦興の名で済生会から出版した。教育勅語「不敬事件」で第一高等学校を追われ、続いて愛娘を失った内村鑑三が「神を呪う」と絶句したのに対し、増野は文子の

との出来無い有様です。泥濘に車輪を埋めた異種異様の箱馬車や荷馬車が、数限りも無く集って居る中を、電車が間断無く往来し」といった文体である。

この「シオドル物語」が国会図書館と神戸女学院図書館に収蔵されていた。神戸女学院へは咲子自身が母校に寄贈したと思われる。咲子は一八七五(明治八)年二月二日、多度津藩元家老畑平學と妻もとの長女として讃岐国(香川県)多度津で生まれた。明治維新後、父平學は同藩大参事として藩政を担当したが、廃藩置県後免官となり、一八八四年頃郡長就任直前に反対派に襲われて負傷し、他界してまった。咲子が九歳の時である。三歳で六人の遺児と残された母とはその後、男児を他家にあずけ、一念奮起して神戸女子伝道学校(現聖和大学)に入り、卒業後松山教会の伝道師として赴任した。弟の敏三は当時夏目漱石がいた松山中学を経て関西学院・東京専門学校へと進み、末弟の忠雄は後に大審院判事となる。聖和大学歴史資料室のアルバム中に、気丈な「畑基子」の写真が残されていた。

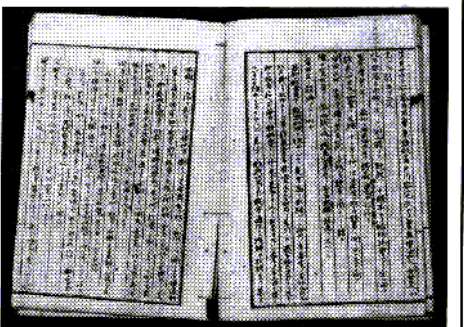
父の死の翌一八八五年、経緯はまだよくわからないが、咲子は単身で神戸の英和女学校(現神戸女学院)へ送られ、そこで予備科三年、普通科五年、高等科一年、計九年間のキリスト教主義教育を受けた。一八九四(明治二七)年二月の神戸女学院の学報兼同窓会誌『めぐみ』八号には、前年六月の咲子の普通科卒業の様子が記されており、「唱歌 畑咲」とある。こうして咲子は修身(旧約・新約聖

書を英語で)、和漢学、英語及英文学、数学、地理、歴史、理科学、博物学、神学、哲学、家内衛生学、心理学、倫理学、家政、書及習字、裁縫、唱歌、音楽、体操、理財学を修めた。

咲子が神戸の英和女学校に入学した翌年の一八八六年三月、卒業直前に同志社を退学した増野悦興は、日本基督教伝道会社から九州に派遣され、その後大阪の浪花教会、岸和田教会の支援をしながら大阪青年会の機関誌『基督教青年』の編集に奔走した。そして、咲子が神戸の英和女学校を卒業し、高等科に進学した一八九三年には、三年間のポストン留学を終えて帰国している。帰国後の増野は東京の靈南坂教会の牧師に就任した。

増野が靈南坂教会の牧師に招聘される前後の事情は「靈南坂教会録事」に記録がある。当初、増野の就任には待遇面で教会員のなかに異論もあったが、教会の臨時総会で増野を第一に推挙したのが旧来の知己で、ジャーナリストの竹越与三郎であった。

来訪した調査委員の質問に対して増野は「余ハ伝道ヲ以テ己レノ天職ト信スルヲ以テ萬一余ノ如キモノニテモ靈南坂教会ニテ御招聘ナサル、ナラバ好シク御招ニ応ジ如何様ニモ働クベシ然シ家族モ多ケレバ生活ノ出来得ル丈ノ収入ヲ要スル故ニ牧師トシテ働ク欠ケザル以上教会ノ許ヲ得テ学校教授及訳或ハ著述ヲ以テ生活費用ノ欠ヲ補フベシ」と答えている。



『靈南坂教会録事』
(同志社大学人文科学研究所移管)

難で、群馬の安中教会へ転出後、増野は教育者への道を歩む。岐阜・金沢から川越に赴任したのが一八九九(明治三二)年春であった。一八九五年に下関条約が締結された頃、二人の若きキリスト教徒の数奇な出会いをとりもつたのが、当時岡山教会牧師であった安部磯雄と夫人村上こまおではなかったかと思われる。安部は増野の同志社での先輩であり、米国のハートフォード神学校経由でドイツから帰国していた。村上こまおは神戸の英和女学校九回生で、一〇回生が咲子である。同年八月下旬、岡山の安部の自宅で二人は結婚した。社会主義者でもあった東京専門学校講師安部磯雄が川越中学第六回講話会で「英独学生の気風」を語ったのは、増野の休職の一月前のことである。同日の増野の惜別となった講話は「中学校教育の第一義」であった。

「畑咲子についての詳細は拙稿『増野悦興研究ノート(一)』(川越高校「紀要」三九集、二〇〇三年)を参照されたい。」
(高一八回)